

5 畜 産

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 梅雨時の畜舎環境及び飼料作物等の管理</p>	<p>(今月の作業・管理のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○梅雨時の畜舎環境及び飼料作物等の管理 ○ハエ対策 <p>四国地方の梅雨入りは平年6月5日ごろであり、今月の中旬頃までの気温は、平年並み又は高い確率が50%と予報されているが、この時期の管理は次の事項等に注意する必要がある。</p> <p>なお、ほ場や周辺設備等の点検は、川の増水等により人命に危険があるため、必ず風雨が激しくなる前に済ませておき、決して増水中の川や水路に近づかない。</p> <p>ア 畜舎環境の管理</p> <p>(ア) 搾乳牛は乳生産による熱発生量が多いため暑さに弱く、また、雨天で湿度が高くなると汗の蒸発による体熱放散の効率が悪くなる。6月の気温は、夜間であっても搾乳牛は暑熱ストレスを感じる気温であり、呼吸の状態や採食量を観察し、影響が認められたら夜間においても送風を行う。</p> <p>(イ) 豚は、梅雨時の多湿等でストレスを受けると、他の豚の尾をかじる行動等が見られることがある。かじられた豚はストレスで飼料摂取量や増体量等が低下するため、換気による除湿や飼育密度を下げる等の対策が有効である。また、尾かじりの原因を起こした豚を見つけ、群から早めに分離することも対策の一つである。</p> <p>(ウ) 鶏の適温は16～25℃で、6月の日中は、適温以上の気温となるため、開放鶏舎では窓やカーテンを開放し、気温を見ながら送風機も稼働させるなど鶏舎内の気温上昇を抑える。ウインドレス鶏舎では鶏舎内温度が均一になるよう換気扇を制御する。</p> <p>イ 飼料作物等の管理</p> <p>トウモロコシやソルガムは湿害に弱く、排水不良畑で栽培すると播種後や梅雨時の降雨で出芽障害や生育不良を起こしやすく、収量が大きく低下するため、次の対策を行う。</p> <p>(ア) 大雨や長雨が想定されるときは、事前に畑を見回り、排水溝がふさがっていないか点検し、清掃する。</p> <p>(イ) 明きよは、ほ場の周縁に沿って掘り（額縁明きよ）、</p>

項 目	作 業 内 容						
<p>(2) ハエ対策</p>	<p>必ず排水口（水尻）につなげて排水する。同時にほ場の中に直線状に明きよを掘る場合も必ず額縁明きよにつなげて排水する。</p> <p>(ウ) 冠水したほ場では、根の障害や茎葉の損傷などで生育不良となるので、水が引いて1週間後10 a当たりチッ素成分で1.0～1.5 kgの追肥を行い、草勢の回復を図る。</p> <p>ハエは、作業員や家畜に対し不快感やストレスを与えるほか、疾病を伝播するなど衛生上の問題も引き起こすため、ハエの防除は生産性や家畜防疫の観点から重要である。防除は、環境対策と薬剤による殺虫をバランス良く実施する。</p> <p>ア 環境対策</p> <p>ハエは湿った糞や飼料に産卵するので、産卵場所を減らすため、早めの除糞を行い、食べこぼした飼料もこまめに掃除する。ハエの卵は、温度40℃以上で死滅し、水分50%以下で孵化率が低下するため、堆肥舎では通風を良くし、堆肥の切り返しを行うなど、発酵温度を上げる適正な発酵処理が不可欠である。</p> <p>イ 幼虫（ウジ）の対策に用いる主な防除薬剤</p> <p>羽化を阻害し死滅させる昆虫成長制御剤（IGR剤）の利用が効果的であり、ハエが発生する時期の前から定期的に防除する必要がある（表1）。</p> <p>表1 ハエ幼虫の防除薬剤と使用方法</p> <table border="1" data-bbox="491 1361 1402 1534"> <thead> <tr> <th>薬 剤</th> <th>特 徴</th> <th>使用方法</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>昆虫成長制御剤（IGR剤）</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・防除効果が高い ・耐性ができにくい ・散布が容易 ・家畜・ヒトに安全 </td> <td>幼虫が発生しやすい糞が貯まる場所（堆積糞周辺、汚水溜り、バンクリーナー周辺等）の糞の上に散布する</td> </tr> </tbody> </table>	薬 剤	特 徴	使用方法	昆虫成長制御剤（IGR剤）	<ul style="list-style-type: none"> ・防除効果が高い ・耐性ができにくい ・散布が容易 ・家畜・ヒトに安全 	幼虫が発生しやすい糞が貯まる場所（堆積糞周辺、汚水溜り、バンクリーナー周辺等）の糞の上に散布する
	薬 剤	特 徴	使用方法				
昆虫成長制御剤（IGR剤）	<ul style="list-style-type: none"> ・防除効果が高い ・耐性ができにくい ・散布が容易 ・家畜・ヒトに安全 	幼虫が発生しやすい糞が貯まる場所（堆積糞周辺、汚水溜り、バンクリーナー周辺等）の糞の上に散布する					
<p>ウ ハエ対策に用いる主な防除薬剤</p> <p>薄暗い雨天、曇天、早朝や夕方等に、畜舎の天井や壁などにとまっているハエに殺虫剤を直接噴霧すると効果的であり、羽化に合わせた10～14日毎の対策が望ましい。</p> <p>殺虫剤には動物用医薬品も含まれており、ラベル等に記載された使用上（用量、用法、服装等）及び保管上の注意を厳守する。同じ薬剤を長期間使用すると、その薬剤が効かないハエ（薬剤耐性の獲得）が発生することがあるため、異なる薬剤をローテーションさせる（表2）。そのため、使用薬剤名や散布日等は記録し保管する。</p>							

項 目	作 業 内 容		
	表2 成虫（ハエ）の防除薬剤と使用方法		
	薬 剤	特 徴	使用方法
	ピレスロイド剤	効果) 速効性がある 注意) 残効性が小さい	水で希釈し、虫体に直接噴霧
	有機リン剤	効果) 残効性がある 注意) 家畜・ヒトに毒性がある	水で希釈し、ハエがよくとまる場所に噴霧又は塗布（残留噴霧）
	ベイト剤 （クロロニコチル系）	効果) 耐性ができにくい 薬剤の飛散・流出が少ない 注意) 施用面積が小さい	殺虫成分と誘因物質を配合した毒餌を摂食させるため、壁や柱に塗布（毒餌法）

(作成 農林水産研究所)